第５章　縄文時代の調査成果について

は　じ　め　に

平成12年度の試掘調査及び平成13～16年度の範囲内容確認調査で得られた資料は多量にのぼり、整理調査も終了していない。また、範囲確認調査という性格上、掘り下げて調査を行っていない部分も多く、所属時期など不明確な点も残されている。詳細な検討は将来的な課題ではあるが、ここでは、これまで本報告で述べてきた調査成果を基に、浦尻貝塚の集落構成と変遷について現在の見解を述べることとする（注１）。また、動物遺存体の調査成果については第４章にまとめてあるので、ここでは詳細は触れないこととする。

第１節　南台・台ノ前・西向地区の調査について

１．遺構について

遺構の種別については、第３章第２節にその分類基準を示している。この基準に基づき、図160に南台地区の種別の分布状況を示した。遺構はⅢ－１層（暗褐色系砂質土・縄文包含層）分布範囲を中心に多く確認されており、南側の南台地区台地中央部では遺構数は減少している。以下では、遺構種別毎に分布状況と形成時期を概観する。

⑴　竪　穴　住　居

竪穴住居は推定も含めて19軒確認している。通時的な分布状況をみると、台地北部のⅢ－１層分布範囲縁辺部に多く確認され、弧状に分布していることが指摘できる。東側の状況は明らかではなく、土坑Ⅰ類（柱穴）が竪穴住居である可能性もあるので、環状集落であるかどうか即断できないが、大木９式期以降はその可能性が高いと予測している。

出土遺物等から推定した時期は次のとおりである（推定して竪穴住居としたものも含む。）。

- 大木５式期　SI06・SI07
- 大木７a式期　SI04
- 大木８～大木10式期　SI02
- 大木９式期　SI03
- 大木10式期　SI01・SI08・SI09・SI13・SI15
- 大木９～10式期　SI16
- 大木９～綱取式期　SI11・SI12・SI14・SI24・SI25
- 綱取式期　SI10・SI17
- 不明　SI18

大木９式期以前の住居は断片的に過ぎないが、52T西に重複して確認されており、居住施設構築場所が踏襲されていることが指摘できる。大木９式期以降増加しており、特に大木10式期の複式炉を伴う住居が明瞭に確認できる。綱取式期までは確実に存在している。

⑵　土坑Ⅰ類（柱穴）

土坑Ⅰ類は推定も含めて58基検出している。通時的な分布状況はⅢ－１層分布範囲を中心として多く分布しており、竪穴住居が弧状に分布する内側に多く認められる。竪穴住居に伴う床面等が削られ、

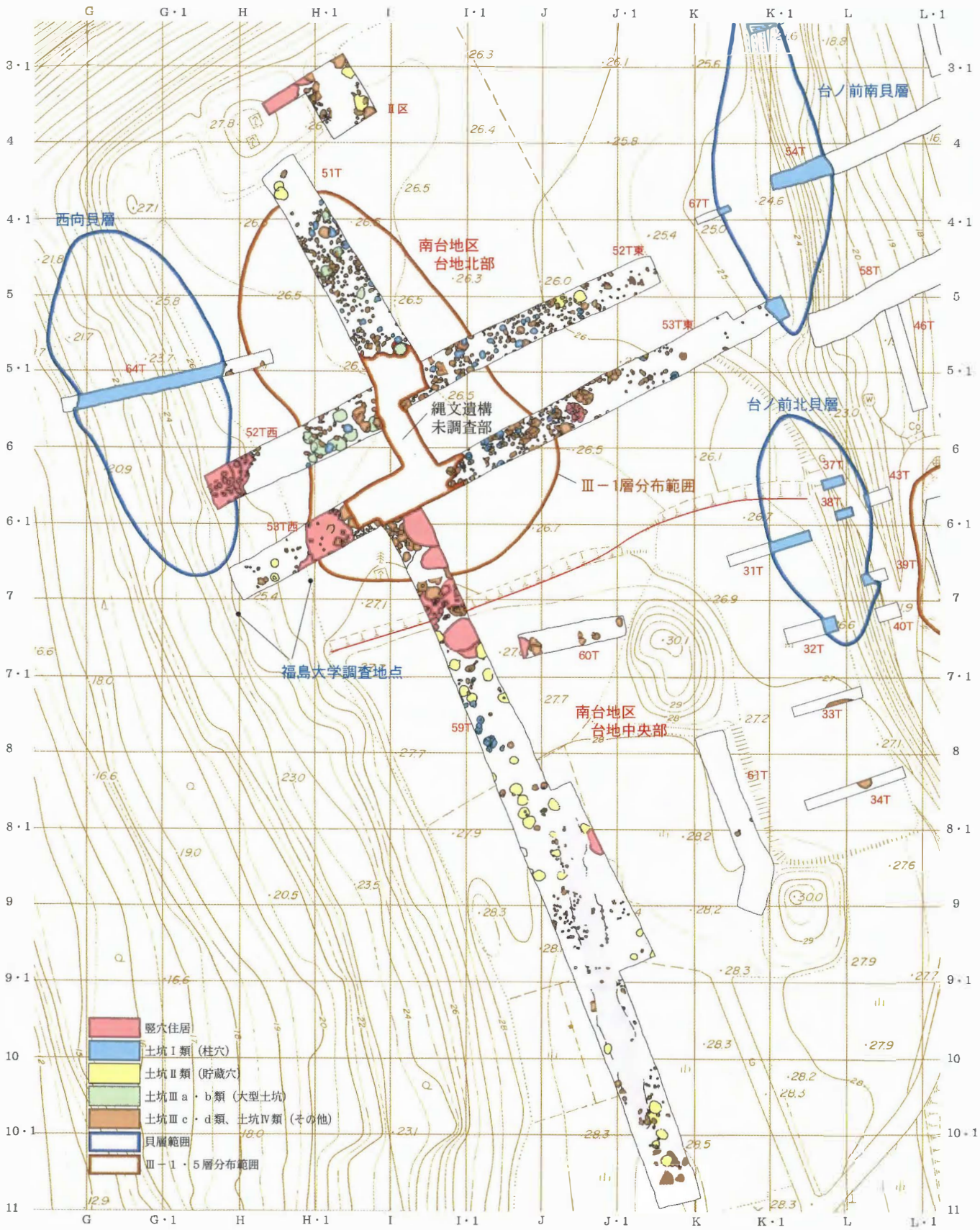


図160　南台・台ノ前・西向地区縄文遺構種別分布図（S＝1/700）

柱穴だけ残存したものも多数あると考えられ、掘立柱建物であるかどうかは定かではない。

南台地区台地中央部にも12基集中して確認されており、これらは竪穴住居とは異なり、掘立柱建物（平地式建物）を構成するものと考えられる。

半裁を行うなど調査を実施したもので、出土遺物等から推定されている時期は次のとおりである。

・大木９式期？　SK170
・大木10式期　SK520
・綱取式期　SK93・SK229・SK235・SK264
・加曽利B式期　SK15

その他の土坑Ⅰ類は大木９～綱取式期に推定され、大木８b式以前は現在のところ確認できない。

南台地区台地中央部の土坑Ⅰ類群（SK520等）は大木10式期と考えられるが、南台地区台地北部のものは綱取式期の所産が明確であり、綱取式期に増加することが推定される。

⑶　土坑Ⅱ類（貯蔵穴）

土坑Ⅱ類は南台地区だけで推定を含め合計35基検出されている。小廹北地区では28基確認されており、浦尻貝塚全体では、合計63基となる。通時的な分布状況をみると、南台地区台地北部ではⅢ－１層分布範囲の外周に多く認められる。

南側の台地中央部では広い範囲に全体的に分布しており、台地中央部の主体的な遺構となっている。特に一定地区に集中度をもって分布しない状況は、南台地区台地南部及び小廹北・南地区まで確認されている。これらは南台地区台地北部及び小廹北・南地区の中期以前の居住地に伴う貯蔵穴群と理解することができる。

半裁を行うなど調査を実施したものを中心に、出土遺物や重複関係から推定されている時期は次のとおりである。

・前期後葉～中期前葉　SK507
・大木７a式期　SK290
・大木７b式期？　SK546・SK548
・大木８a式期　SK545・SK630
・大木８a式期以後　SK649
・大木８式期　SK04
・大木９式期　SK03・SK643
・大木９式期以後　SK506
・不明　SK620

土坑Ⅰ類に比較し、古い段階のものが多く、大木９式期以前の構築が多い。南台地区台地南部、小廹北地区では、大木６式、大木７b式、大木９～10式、大木10式期のものが確認されており、前期末以降中期末まで継続的に構築されていたことが確認できる。南台地区台地北部の土坑Ⅱ類と南台地区台地中央部～南部、小廹北地区の土坑Ⅱ類の構築時期は大きな差はないと考えられるが、南台地区台地北部の土坑Ⅱ類は、重複関係や出土遺物から大木10式期以降構築されていないものと推定される。

⑷　土坑Ⅲ類（大型土坑）

土坑Ⅲ類は推定を含め合計41基検出されている。土坑Ⅲ類はさらに細別を行った。Ⅲa類とⅢb類は検出箇所、形成時期、基調となる覆土は異なるが、一方向の壁際に傾斜した堆積状況、大形のレキを含むものが多いこと、土器の出土状況等は類似点が多い。これらの機能としては、墓壙の可能性が高

いと考えている。土坑Ⅲc・d類もその可能性があるが、竪穴住居に伴うものなどが含まれていると考えられる。図160では墓壙の可能性が高い土坑Ⅲa類とⅢb類のみ分けて示した。

土坑Ⅲa類は覆土が黒色基調のものである。SK20・54・61・92・119の5基が該当し、うち３基（SK54・92・119）が加曽利B式期に形成されたものである。いずれも51TⅢ－１層分布範囲で確認され、SK119はⅢ－１層上から構築されている。その他のものも時期は不明であるが、覆土の特徴から加曽利B式期に形成されたものの可能性が高い。

土坑Ⅲb類は52T西で集中して分布するもので、10基が該当する。しかし、これらは同一遺構を別遺構としている可能性があり、これを統合して整理すると７基となる。

半裁を行うなど調査を実施したもので、出土遺物等から推定されている土坑Ⅲb類の時期は次のとおりである。

・大木８a式期　　SK173（171）
・大木８式期？　　SK169（163・164）
・大木９式期　　SK178
・大木９～10式期　SK160（161）

これらは土坑Ⅰ類に比較し、古い段階が多く、大木９式期以前の形成が多いものと考えられる。

⑸　土坑Ⅳ類・小土坑

土坑Ⅳ類は南台地地区台地北部･中央部では437基確認されており、小土坑は498基確認されている。Ⅲ－１層分布範囲に多く分布し、特に大木９～綱取式期の所産が多いものと推定される。

⑹　埋　設　土　器

埋設土器は、掘り込みを伴って埋設されているものが８基確認されている。他にSK03（土坑Ⅱ類・貯蔵穴）を転用したものと西向貝層上に１基存在する（SM01）。このうち、SK138、SK320、SK399、SK480は竪穴住居と重複またはこれに伴うものと考えられる。この他、SK197も複式炉の埋設部の可能性がある。分布状況に大きな特徴は見出せないが、他遺構と同じくⅢ－１層分布範囲周辺に多く認められる。

出土遺物等から推定されている時期は次のとおりである。

・大木８a式期　　SM01
・大木９式期　　SK03・SK138
・大木10式期以後　SK320
・綱取式期　　SK217・SK399・SK424
・中～後期　　P938・SK197・SK480

⑺　道 路 状 遺 構

道路状遺構は南台地区台地中央部に存在し、大木10式に埋没したものである。

⑻　遺 構 の 変 遷

この遺構分布状況及び変遷を次のようにまとめた。

①　前期後葉から遺構は構築されていると考えられ、前期末に南台地区台地北部では竪穴住居が存在する。

②　前期末～中期中葉に貯蔵穴（土坑Ⅱ類）が多く構築されるようになり、南台地区台地中央部～小廻北地区にかけて貯蔵穴群が形成され、中期末まで営まれる。また、中期中葉に南台地区台地北部において断片的ながら竪穴住居が確認される。

③　中期中葉から中期後葉にかけて、南台地区台地北部の一角に、墓壙と推定される土坑（土坑Ⅲb類）が構築される。

④　中期後葉は、確認される遺構数が増加し、中期末～後期前葉に遺構数の最盛期を迎える。特に南台地区台地北部を中心に遺構が構築されている。中期末の複式炉をもつ竪穴住居が多く存在し、見かけの分布状況は弧状を呈するようになる。

⑤　柱穴は中期後葉以降に構築されており、後期前葉に最も多く認められる。南台地区台地中央部の竪穴住居と離れた位置に確認される柱穴群は中期末に構築される。

⑥　南台地区台地中央部の貯蔵穴分布範囲内に、竪穴住居がある南台地区台地北部と西向地区から入り込む谷の谷頭を結ぶ道路状遺構が存在する。道路状遺構は中期末に埋没する。

⑦　埋設土器は中期中葉～後期前葉のものがある。

⑧　後期中葉は、墓壙と推定される土坑（土坑Ⅲa類）が南台地区台地北部に少数存在する。柱穴はわずかに確認できるが、明確な居住施設は不明である。

２．台ノ前北貝層・台ノ前南貝層・西向貝層について

貝層は段丘の東西斜面に３箇所確認することができた。いずれも東西幅15～20m、南北30～40mを測る。標高25～26mの台地上から斜面に向かって堆積しており、貝層下の標高は20m前後である。各層の分類基準を改めて示しておく。

混貝土層　貝の混入率が比較的高いもの。

土主体層　貝の混入率が低いもの。褐色系統の明るい色調のものが多い。また、貝層最下層にあたり、比較的獣骨土器の出土の多い層も含めた。

土　　層　肉眼で貝の混入が認められなかったが、混貝土層・土主体層と一連のものと考えられるものである。土主体層と同様に褐色を基調とするものが多い。

各層は、これらが上下に重なるか、互層となって確認されている。堆積状況等を踏まえ、これら検出された貝層を次のように整理・類型化した。

Aタイプ　混貝土層を中心としたもの。さらに次のように細別される。

Ａ１：大木７a～９の所産で、主にBタイプの上位（斜面下位）に、明確な広がり、層厚をもって堆積しているもの。一部土主体層が含まれるが、土主体層の層厚は薄い。台ノ前北貝層では54T大別b層、台ノ前南貝層では38T（ⅢＡ～G層）、西向貝層では、64Tの大別b層が含まれる。63T２・３・５層も含めておく。

Ａ２：綱取期の所産で、貝の混入率が極めて高いもの。64Tの大別a層が相当する。

Bタイプ　土層・土主体層が中心となるもの。一部貝層最下層にあたり廃棄開始段階のもの、または54Tの土主体層に挟まれ、厚さの無い混貝土層も含めた。台ノ前北貝層では54T大別c～l層、台ノ前南貝層では31TⅢＡ～E層、西向貝層では64T大別c･d層が相当する。63T１・４層も含めておく。

Cタイプ　ブロック状に確認される小規模な貝層であり、前期段階のものである。台ノ前北貝層では、53T東Ⅲ－3層、台ノ前南貝層では31TLⅣ１・２貝層が相当する。

浦尻貝塚を特徴づける貝層はこのうちBタイプである。台ノ前北・南、西向貝層のいずれの貝層でも層厚をもって堆積している。また、BタイプやＡ１タイプに見られる土層･土主体層は、貝層中のいわゆる「間層」ではなく、多量の獣魚骨及び土器が含まれている。これは廃棄行為が停滞するなど自

然堆積として形成されたものではなく、むしろ積極的な人の関わりを認めることができる。このことからBタイプは貝の廃棄以上に土の廃棄が多く行われていたものとすることができる。Cタイプは部分的に台ノ前北・南貝層で確認され、Aタイプは概ねBタイプの上位（斜面下位）に存在している。

これらの堆積状況から、それぞれの形成状況は次のように推定される。

① Cタイプは貝・獣骨の廃棄が小規模であったものと考えられる。

② Bタイプは貝・獣骨の廃棄とともに、土の大量廃棄が行われたものと考えられる。

③ A１タイプは土の廃棄も行っているが、むしろ貝の廃棄が多く行われたものと考えられる。

④ A２タイプは土の廃棄は行われず、貝の廃棄が積極的に行われたものと考えられる。

以下では貝層ごとに形成過程を整理しておく。

⑴ 台ノ前北貝層

台ノ前北貝層では、詳細は不明であるが、大木３～４式期にCタイプが53T東で確認され、浦尻貝塚の貝層で最も古いものと考えられる。

本格的な形成は大木６式期からであり、54TでBタイプが形成される。54Tでは大木６～７a式期にかけてBタイプが1.8mの厚みをもって確認されている。さらに、Bタイプ上に比較的厚みをもったA１タイプ（大別b層）が形成されている。この54TのA１・Bタイプの下限は確実ではないが、出土遺物から見る限り、ほぼ大木７a式段階で収束するものと考えられる。ただし、調査面積が狭いことと上位が削平されていることもあり、より新しい段階まで形成されていた可能性もある。

63Tでは混貝土層と土主体層が互層となった状況が平面的に確認されており、A１タイプとBタイプの両者が存在するものと考えられる。上面から出土する遺物から見ると、大木７b～８b式期までに形成されたものと考えられる。よって、台ノ前北貝層では、部分的で小規模ではあるが、大木８b式期まで継続して貝層の形成があったことが推定される。A１・Bタイプいずれも主体となる貝種はアサリであり、獣魚骨の出土量は多い。

また、調査を行った台ノ前北貝層の貝層Bタイプは、台ノ前南貝層のように土層が中心の部分は認められず、一定量の貝が層中に含まれる土主体層が中心である。この相違点はBタイプを確認したのが、斜面下位に当たることによると考えられる。斜面上位にあたる67Tで確認した貝層は土層中心のBタイプに相当する。

⑵ 台ノ前南貝層

台ノ前南貝層では、大木５式期にCタイプの形成がある（31TⅣa層）。斜面上位では、Cタイプと間層をもって大木６～７a式のBタイプ（31TⅢA～E）が形成されている。斜面下位では大木７a～９式にかけて、混貝土層と土主体層が互層となったA１タイプ（38TⅢA～G層）が形成される。このA１タイプには大木８式の土器が極めて少ないが、明瞭な間層は確認できなかった。いずれも主体となる貝種はアサリであり、獣魚骨の出土量は多い。ただし、斜面上位のBタイプには動物遺存体があまり含まれない土層（31TⅢA・B層）が上層に存在する。

⑶ 西　向　貝　層

西向貝層では、貝層形成開始段階は不明で、Cタイプは確認していないが、台ノ前北・南貝層と同様、大木６～７a古段階にはBタイプが形成される。Bタイプは大木７a式を中心とし、大木８a式期にはほぼ堆積を終えている。Bタイプ上層は土層が中心で動物遺存体があまり含まれない（64TS3－３～９層）。斜面下位には、大木7式期中心のA１タイプの形成があり、下限は定かではないが、大木９式期までは下がらないものと推定される。いずれも主体となる貝種はアサリである。Bタイプ上層を

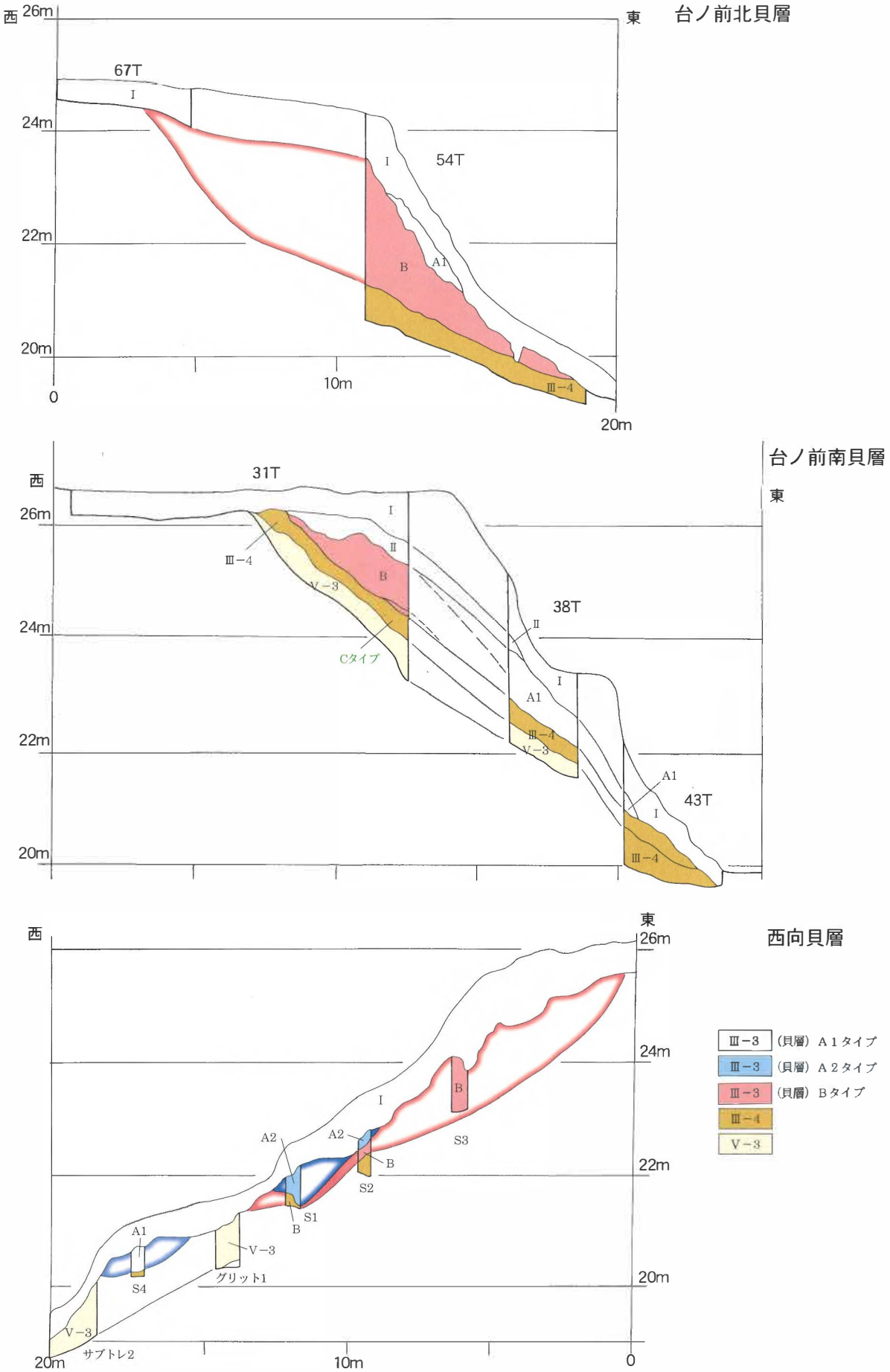


図161　貝層断面模式図（S＝1/200・1/100）

除き、獣魚骨の出土量は多い。

西向貝層では、Ａ１・Ｂタイプの上層にＡ２タイプが綱取式期に形成される。Ａ２タイプは土主体層を全く含まず、混貝率が高い。また特定の貝種（マテガイ・ツメタガイ等）が集中している層が確認できるなど、堆積状況にも大きな違いが認められる。ただし、主体となる貝種はＡ２タイプもアサリである。

⑷　貝層の形成過程

この貝層形成過程を次のようにまとめた。

①　前期後葉から台ノ前北・南貝層で、小規模ながら形成が認められる（Cタイプ）。

②　前期末～中期前葉にかけて、いずれの貝層でも、斜面への貝・獣魚骨及び土の大規模廃棄が開始される（Bタイプ）。特に中期初頭（大木７a式期）に活発に行われ、斜面上位の上層部分では土廃棄のみ積極的に行われた時期が認められる（31T・64T）。また、斜面下位は貝の廃棄が比較的多く認められる（Ａ１タイプ）。

③　前段階で行われた斜面への貝・獣魚骨及び土の廃棄（Bタイプ）は中期中葉には縮小する。部分的には中期中葉（台ノ前北・63T）、中期後葉（台ノ前南・38T）も行われているが、土の廃棄よりも貝の廃棄が比較的多い（Ａ１タイプ）。

④　中期末（大木10式期）には、貝層の形成が確認できない。

⑤　後期前葉には、西向貝層において、土の廃棄はないが、部分的に貝の廃棄が行われる（Ａ２タイプ・64T）。

３．遺物包含層について

台ノ前地区斜面部（Ⅰ区）と西向地区斜面下部（65T等）で遺物包含層（Ⅲ－５層）が確認された。いずれも、層厚はなく、貝層（Ⅲ－３層）のように大型土器片や獣魚骨は認められない。西向地区（65T）では、遺物包含層下に綱取式期の土坑を確認している。段丘上のように遺構は集中しないが、遺物包含層の存在は斜面下部及び低地付近まで、縄文時代の活動が行われていたことを示していると考えられる。

下限は綱取式期と考えられるが、それ以前の土器も含まれており、これらの分布範囲では、より古い時期の活動が行われていた可能性が指摘できる。

４．縄文時代の掘削行為について

⑴　ローム層の欠落について

これまで報告してきたように南台地区台地北部の広い範囲では、通常段丘上に堆積し、縄文遺構の基盤層となるローム層（Ⅳ層）が欠落していた。この範囲で縄文時代の遺構は段丘堆積層（Ⅴ－２層）を掘り込んで構築されている。ローム層の欠落については、貝層の形成、遺跡の変遷と関係することであるので、検討を加えることとにする。

南台地区の堆積土を改めて記すと次のようになる。

Ⅰ層　表土

Ⅱ層　黒色～黒褐色土。（砂質土を含む。）

Ⅲ層　縄文時代の堆積層。これらの各層を、南台・西向・台ノ前地区では次のように大別した。

Ⅲ－１層　暗褐色系統の砂質土。粘質がない堆積土である。

Ⅲ－２層　台地上に堆積するもので、暗褐色・褐色を基調とする。

Ⅲ－３層　貝層。

Ⅲ－４層　斜面部の無遺物層。

Ⅲ－５層　斜面部の貝層以外の縄文遺物包含層。

Ⅲ－６層　褐色系統の砂質土で、遺構覆土として確認できる層である。

Ⅳ層（ローム層）

Ⅳ－１層　軟質ローム（ソフトローム）

Ⅳ－２層　硬質ローム（ハードローム）

Ⅳ－３層　砂質ローム。

Ⅴ層（ローム層下の段丘堆積層）

Ⅴ－１層　褐色砂質土。Ⅳ－３層とⅤ－２層の漸移層。

Ⅴ－２層　砂・レキ・砂レキ。

堆積状況を改めて確認するため、調査区土層断面図等の調査成果から、模式図（図162）を作成した。まず、Ⅳ層（ローム層）の基盤となるⅤ層の堆積を確認しておく。南台地区台地北部・中央部では砂層、砂レキ層等からなるⅤ－２層及び漸移層であるⅤ－１層が堆積している。Ⅴ層は南から緩やかに傾斜するが、ほぼ平坦な堆積をしている。

Ⅳ層は南台地区台地中央部では明瞭に確認できるのに対し、南台地区台地北部では北端及び台地縁辺部のみ確認でき、その中央部分において欠落している。特にⅣ－２層（硬質ローム）については北端と南側の台地中央部側しか確認されない。

Ⅳ層は基盤が平坦であればほぼ同様の層厚をもって堆積すると考えられるのに対し、南台地区台地北部の中央部のみ欠落しているこの堆積は不自然な状況と言える。また、Ⅳ層は南側の台地中央部では１ｍ以上の堆積があり、自然に失われたとは考えにくい。この堆積状況から、Ⅳ層は本来、段丘上に堆積していたが、後世の人為的な掘削ならびに土の移動（廃棄）によって失われたものと考えられる。

では次にどの段階でⅣ層が失われたのかを検討する。これについては、Ⅳ層が欠落している部分においてⅤ層直上に堆積するⅢ－１層の時期決定が重要となる。

Ⅲ－１層は大木９～綱取式が多く出土する。また、大別するとⅢ－１層に相当する覆土を持つ大木

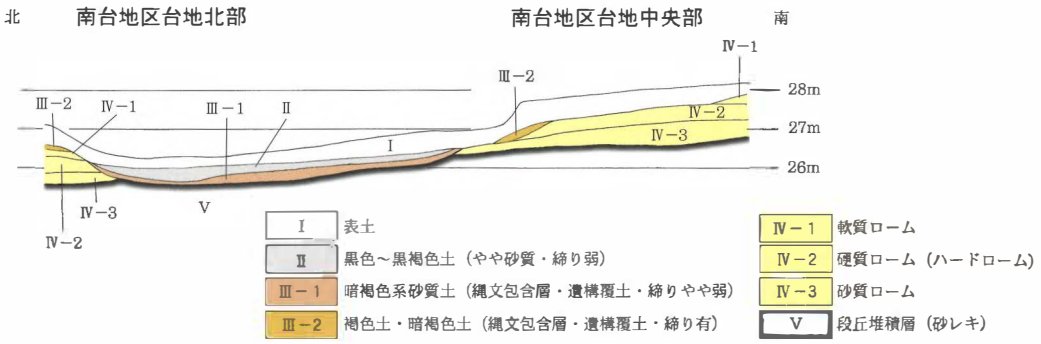


図162　南台地区土層断面模式図（S＝1/1,000・1/200）

９～綱取式の遺構が多く確認されている。今回報告している中でも、南台地区台地北部の土坑Ｉ類の大部分及び大木10式期の竪穴住居（SI09）覆土もⅢ－１層である。また、平安時代の竪穴住居や時期不明の溝の他、加曽利B式期の土坑（SK119）など黒色系統の遺構が、Ⅲ－１層上面から構築されている。

このことにより、Ⅲ－１層は大木９～綱取式期の所産であり、加曽利B式期にはほぼ堆積を終えていると考えられる。よって、本来Ⅴ層上に堆積していたⅣ層は、Ⅲ－１層が堆積する以前（大木９式期以前）に掘削が行われ、無くなっていたと考えられる。そして、この掘削行為に伴う土の廃棄により、先に述べた東西斜面に存在し、土層・土主体層を含む貝層Bタイプ・Ａ１タイプが形成されたと考えられるだろう。

また、Ⅳ－３層（砂質ローム）はⅤ層と漸移的な部分も認められるので、確実に失われたといえるⅣ－２層（硬質ローム）以上が掘削されたとすると、南台地区台地中央部のⅣ層の堆積状況からみて、その深さは約70㎝ 以上であると推定される。さらに、Ⅳ－３層までの掘削とすると約1.0m以上の深さと考えられる。

⑵　掘削範囲について

次に、掘削が行われた範囲を検討することとする。まず、Ⅴ層上にⅢ－１層が確認できる範囲は、確実に縄文時代に掘削が行われていたものと考えることができる。Ⅲ－１層は約54×35mの範囲で確認される。問題となるのは表土直下にⅤ層が確認された部分である。この部分については、縄文時代に掘削されたか、より新しい時期に耕作等で失われたのか定かではない。これを推定するために遺構覆土に注目することとする。ここでは埋没時の遺構周辺の堆積土が遺構覆土を形成すると仮定している。

南台地区台地北部・中央部において確認された縄文時代の遺構覆土を次のように大別した。

覆土A類　　粘性のある締りの強い覆土。（褐色・暗褐色を基調とする。Ⅲ－２層相当。）

覆土B類　　砂質で、締りがやや弱い覆土。さらに次の２類に細別できる。

　　１類　褐色を基調とする。（基本土層Ⅲ－６層と大別している。）

　　２類　暗褐色を基調とする。（Ⅲ－１層相当。）

覆土C類　　黒色、黒褐色を基調とする覆土（砂質土も含む。Ⅱ層相当）

遺構覆土は当然のことながら、上層と下層で異なることがあり、ここで類型化した遺構にも、上層で覆土A類、下層で覆土B類に含められるものなどが認められる。また遺構種別によっては、人為的な埋め戻しが行われる等の堆積環境が異なることが予測される。さらに、別遺構の覆土を統合することについては、多分に主観的な認識が左右すると考えられる。しかし、この４類は比較的分別しやすいことや失われた堆積環境を検討する方法としてあえて分類を試みた。半裁したもので、両者が混じる場合はB･C類の堆積土を優先した他、最下層等は外し、主体となるもので分類した。また、半裁していないものは上面確認のみで分類している。

ここで分類した覆土種別の分布状況を確認するため、図163を作成した。この分布状況から次のことが指摘できる。

覆土B･C類はⅢ－１層分布範囲を中心とし、ほぼⅣ－２層（硬質ローム）が確認できない部分においてのみ分布する。ただし、C類については、小廻北地区（Ⅳ－２層）の後晩期の遺構では多数確認されている（砂質土は除く。）。逆に、覆土A類はⅣ－２層確認範囲ではほぼ全ての遺構が該当し、Ⅳ－２層が確認できない部分においても少数認められる。

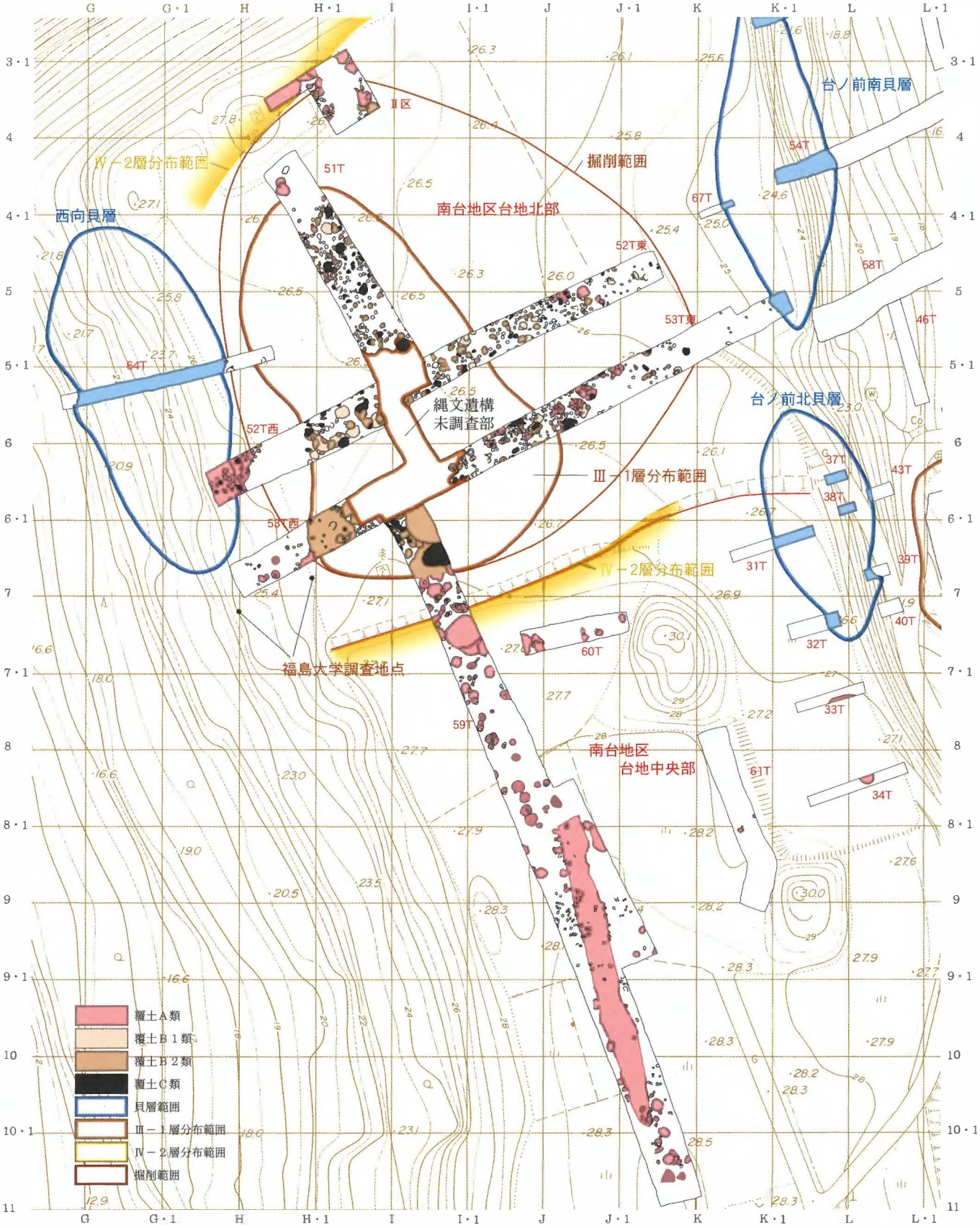


図163　南台・台ノ前・西向地区縄文遺構覆土種別分布図（S＝1/700）

このことから、覆土A類の遺構はⅣ－２層が存在した箇所（段階）で、埋没したものが多いと考えられる。よって、覆土A類の遺構が存在していた箇所は、現在Ⅳ－２層が確認できなくても、遺構埋没時にはⅣ－２層が存在していた可能性が高いと考えられる。

また、覆土B類は、砂質という特徴も考慮すると、Ⅳ－３層（砂質ローム）、Ⅴ層（砂・砂レキ・レキ）が混入して形成されたものと考えられる。このことと分布状況を考えあわせると、覆土B類の遺構はⅣ－２層が欠落した箇所（段階）で埋没したとできよう。よって、覆土B類の遺構分布範囲は、Ⅳ－２層が掘削された範囲を示すと推定される。その範囲は約64×60mに及ぶ。これを掘削範囲（くぼ地）と表現することとする。

⑶　掘削過程の復元

次に、掘削行為の過程を検討する。先に検討した貝層Bタイプ･Ａ１タイプは、掘削行為に伴う土の廃棄により形成されたと考えられるので、その形成段階は掘削時期を示すものと言える。貝層Bタイプは前期末～中期前葉（大木６～７a式期）に大部分が形成されており、この段階で活発な掘削が行われたと考えられる。また、中期後葉まで断続的にBタイプ･Ａ１タイプが認められることから、縮小しながらも、中期後葉まで掘削が継続していたことが認められる。後期前葉には土の廃棄のないＡ２タイプが形成されているので、掘削は終了していると推定されよう。

さらに、Ⅳ層がどの段階で失われていたのかどうかを検討する。先に分類した覆土種別を、掘削範囲にあり、時期がほぼ確定しているものについて分類すると、次のようになる。

覆土A類（Ⅲ－２層）
・大木７a式期　SK290（土坑Ⅱ類）
・大木８式期　SK04（土坑Ⅱ類）
・大木９式期　SK03・SK643（土坑Ⅱ類）
・綱取式期　SK404（竪穴住居炉）

覆土Ｂ１類（Ⅲ－6層）
・大木８a式期　SK173（土坑Ⅲb類）
・大木８式期？　SK169（土坑Ⅲb類）
・大木９式期　SK178（土坑Ⅲb類）
・綱取式期　SK229（土坑Ⅰ類）

覆土Ｂ２類（Ⅲ－１層）
・大木９式期？　SK170（土坑Ⅰ類）
・大木10式期　SI09（竪穴住居）
・綱取式期　SK93・SK235・SK264（土坑Ⅰ類）、SK217・SK424（埋設土器）
・加曽利B式期　SK15（土坑Ⅰ類）

覆土C類（Ⅱ層）
・大木９～10式期　SK161（土坑Ⅲb類）
・加曽利B式期　SK54・SK92・SK119（土坑Ⅲa類）

このことから次のような傾向が見出せる。

覆土A類・Ｂ１類は大木９式期以前のものが多いのに対し、覆土Ｂ２類は大木９式以後、特に綱取式期までが顕著である。覆土C類は加曽利B式期に主体となっている。このことは、覆土Ａ・Ｂ１類⇒Ｂ２類⇒C類というおおまかな順番を示していると考えられる。掘削範囲内における各遺構の重複関係

でも、この傾向を多く認められる。

このことから掘削範囲の堆積土は、掘削以前のⅢ－２層（暗褐色土等・覆土A類）から、掘削が進むにつれ砂質系統のⅢ－６層（褐色砂質土・覆土Ｂ１類）、さらにⅢ－２層（暗褐色系統砂質土・覆土Ｂ２類）が堆積し、その後Ⅱ層（黒色基調、覆土C類）が堆積する過程が推定される。時期的には、Ⅲ－６層の堆積は大木８式期以降、Ⅲ－１層の堆積は大木９式以降綱取式期、Ⅱ層の堆積は加曽利B式期以降主体になると考えられる。ただし、覆土の種別が各遺構の時期を確実に示すものではないことは、綱取式期の覆土A類・Ｂ１類の存在や加曽利B式期の覆土Ｂ２類の存在によっても明らかである。

また、このことから、Ⅳ－２層の掘削過程を推定すると、覆土A類の存在から大木９式期までは掘削範囲一部でⅣ－２層が存在していた可能性が指摘でき、逆に覆土Ｂ１類の存在から大木８式期には既にⅣ－２層が失われ、Ⅴ層上面まで掘削が及んだ箇所があると考えられる。また、覆土Ｂ２類の全面的な分布状況から大木10～綱取式期にはⅣ－２層はほぼ削り取られているとすることができる。この過程は、土の廃棄場所（貝層）からみた掘削行為の過程と概ね一致するものと言える。

(4)　掘削行為に伴う遺構の破壊

掘削範囲は大木８b式期以前の遺構が極めて少なく、遺構と貝層の形成のピークは一致しない。この原因の一つとして、掘削行為により前段階の遺構が破壊されていることが想定される。

掘削範囲における土坑Ⅱ類（貯蔵穴）は、極めて浅く、底部付近のみ残っているような状況である（SK290・SK643）。特にSK643では、上面にⅢ－１層が堆積しており、後世の耕作等により上部が削られたわけではなく、Ⅲ－１層堆積以前に既に上部が削られていることが確認される。このように掘削行為は前段階の遺構を破壊しながら行われたものと考えられる。

また、大木９式期の遺構は、大木10～綱取式期の遺構が多数検出されているにも関らず、多く確認されている。このことから、少なくとも大木10式期以降、遺構の構築が多くとも、前段階の遺構の大部分を破壊する行為、あるいは掘削範囲（くぼ地）底面の低下を伴う掘削行為は行われていないと考えられる。この見解は、先にみた掘削行為の過程からも推察される。

５．縄文時代の南台・台ノ前・西向地区の変遷について

これまで述べてきた遺構、貝層、及び掘削行為の変遷について、表６に整理し、図164･165にその変遷過程を示した。また、時期別の状況を図166～170に示した。時期的な概略は次のとおりである。

Ⅰ期　前期初頭～中葉

土器の散布のみ認められる時期である。

Ⅱ期　大木３～５式期

小規模な貝層の形成が始まり、台地北部を中心に、竪穴住居など遺構が構築される時期である。

Ⅲ期　大木６～７a式期

台地北部を中心にローム層の掘削行為が開始され、斜面への土および貝の大量廃棄が活発に行われる。また、遺構数の増加が伺えるが、明確な遺構は断片的な竪穴住居と貯蔵穴が存在するのみである。本期の遺構の多くは後世に破壊されていると推定される。

Ⅳ期　大木７b～８b式期

南台地区台地中央部～小廻北地区にかけての貯蔵穴群が明確になってくる。掘削範囲を中心とした集落構成は、墓壙と考えられる土坑Ⅲb類や貯蔵穴群が明確であることから、断続期や縮小期がありながらも継続していたと考えられる。ただし、竪穴住居は推定されるだけである。貝層の形成

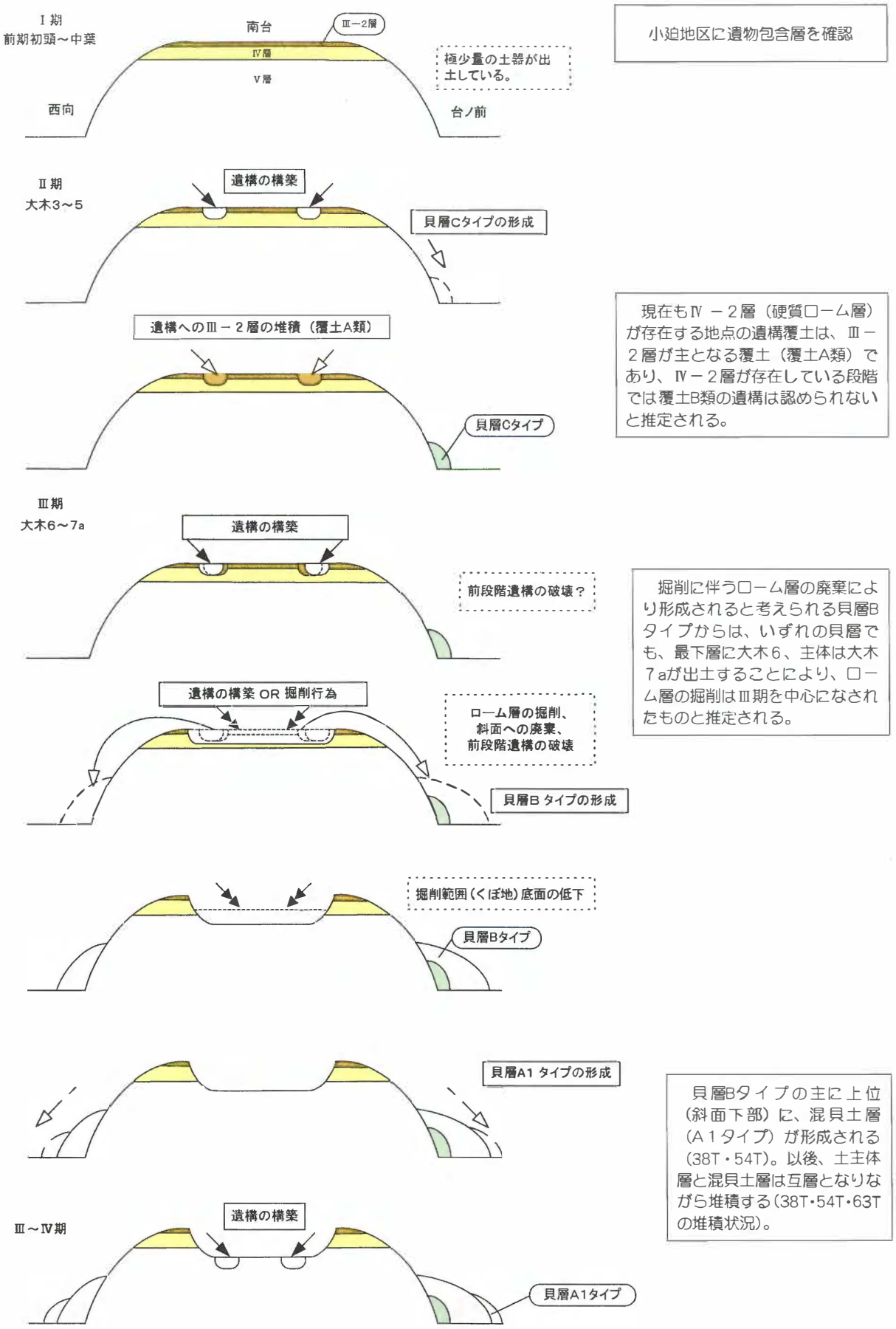
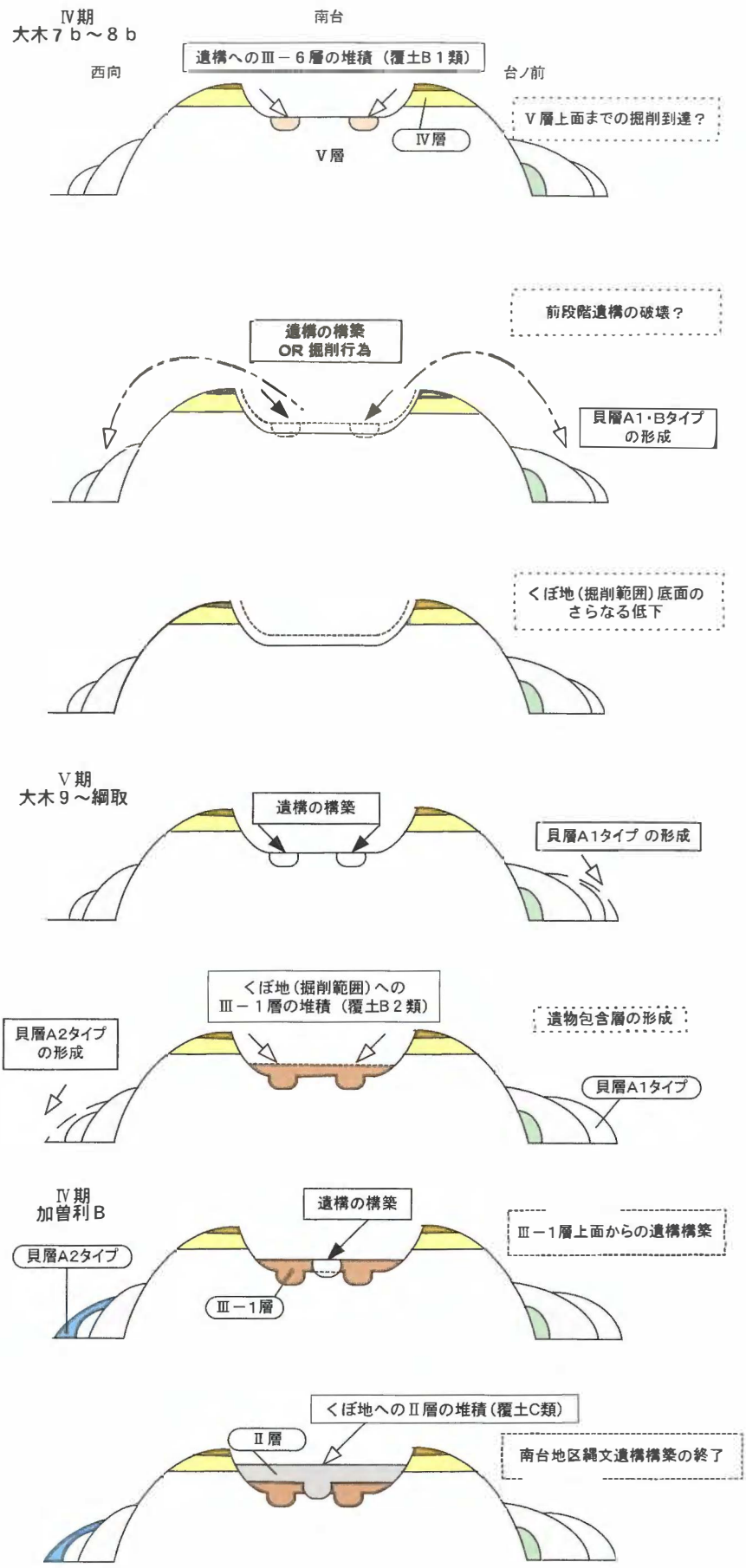


図164　南台・台ノ前・西向地区縄文時代台地利用変遷図①



Ⅴ期以前に、覆土Ｂ１類（Ⅲ－６層〔褐色砂質土〕）の遺構が存在する。Ⅲ－６層は、Ⅳ－３層（砂質ローム）及びⅤ層（砂・レキ層）が混じった掘削範囲（くぼ地）特有の土層と考えられる。
このため、掘削はⅤ期以前の段階でⅤ層上面まで、一部到達していたものと推定した。

Ⅲ～Ⅴ期において、掘削範囲（くぼ地）外縁で貯蔵穴を確認していることや断片的ながら掘削範囲（くぼ地）においても遺構の構築を推定していることから、掘削範囲（くぼ地）を中心とした集落構成は、断続期や縮小がありながらも、ほぼ継続していたと考えられる。

Ⅳ期の掘削行為については、僅かに63Tでのみ貝層Bタイプの形成が確認できる程度であり、Ⅲ期ほど大規模ではないと考えられる。
しかし、Ⅳ期においても、集落が踏襲されていることと前段階の遺構が少ないことから、遺構の構築及び掘削行為による前段階遺構の破壊及び掘削範囲（くぼ地）底面の低下がなされていたと考えられる。

大木９の遺構は、大木10及び綱取期の遺構が多数検出されているにも関わらず、多く確認されている。
よって、少なくとも大木10以降は、遺構の構築が多くとも、前段階の遺構の大部分を破壊する行為、あるいは掘削範囲（くぼ地）底面の低下を伴う掘削行為はなされていないと考えられる。

Ⅲ－１層の掘削範囲（くぼ地）への堆積は、これまでの掘削行為が縮小されたことによると考えられる。

図165　南台・台ノ前・西向地区縄文時代台地利用変遷図②

表6　南台・台ノ前・西向地区変遷表

時期区分	細別時期	土器型式	ローム層掘削部の主な覆土種別	ローム掘削部の主な推定堆積土	遺構の形成：竪穴住居	土坑Ⅰ類（柱穴）	土坑Ⅱ類（貯蔵穴）	土坑Ⅲa b類（大型土坑）	埋設土器	土坑Ⅳ類（その他）	内容	貝層の形成：台ノ前北貝層	台ノ前南貝層	西向貝層	内容	遺物包含層の形成：台ノ前斜面	西向斜面下部
Ⅵ	1	加曽利B	覆土C類	Ⅱ層		○		○		○	・遺構数の激減。 ・竪穴住居の消滅。 ・掘削範囲内での大型土坑構築。						
Ⅴ	3	綱取	覆土B2類	Ⅲ-1層	○	◎			○	◎	・竪穴住居の減？ ・柱穴の増。 ・貯蔵穴の消滅。			○ A2タイプ〔64T大別a層〕	西向のみで貝廃棄。	○	○
	2	大木10	覆土B2類	Ⅲ-1層	◎	○		△	△	◎	・竪穴住居、柱穴の増。 ・掘削範囲中央で、大型土坑構築終了？ ・貯蔵穴の減？ ・道路状遺構。					△	△
	1	大木9	覆土B2類	Ⅲ-1層	○	△	○	○	○	◎	・遺構数の激増。 ・竪穴住居の増、柱穴の出現？ ・道路状遺構？		○ Bタイプ？〔38TB・C層〕 / A1タイプ〔38TⅢA・D層〕		台ノ前南で、土及び貝廃棄。	△	△
Ⅳ	3	大木8b	覆土A類 / 覆土B1類	Ⅲ-2層 / Ⅲ-6層	△		△	△		△	・遺構数の減？	Bタイプ（63T1層） / A1タイプ？	Bタイプ？ / A1タイプ？	A1タイプ？	台ノ前北で、土・貝等の廃棄終了。	△	△
	2	大木8a	覆土A類 / 覆土B1類	Ⅲ-2層 / Ⅲ-6層	△		○	○	○	△	・遺構数の増？ ・南台地区～小迫北地区での貯蔵穴の構築。 ・掘削範囲中央で、大型土坑構築。	○ Bタイプ？ / A1タイプ〔63T2・3層〕	△	△ Bタイプ？	西向で、土の廃棄終了。 断続的○ R小 規模な廃棄？	△	△
	1	大木7b	覆土A類	Ⅲ-2層			△			△	・遺構数の減？	Bタイプ〔63T4層〕 / A1タイプ〔63T5層〕			土及び貝等廃棄の縮小。 断続的○ 小規模な廃棄？	△	△
Ⅲ	2	大木7a	覆土A類	Ⅲ-2層	○		○			△	・遺構数の増。 ・竪穴住居の構築。 ・貯蔵穴構築。	◎ Bタイプ〔54T大別c～l層〕 / A1タイプ〔54T大別b層〕	◎ Bタイプ〔31TⅢA～E層〕 / A1タイプ〔38TⅢE～G層〕)	◎ Bタイプ〔64T大別c層〕 / A1タイプ〔64T大別b層〕	活発な土及び貝等大規模廃棄。	△	△
	1	大木6	覆土A類	Ⅲ-2層			△			△		○ Bタイプ〔54T大別l層〕	○ Bタイプ（31TⅢE～Ⅳa層）	△ Bタイプ？	斜面への土（ローム）及び貝等大規模廃棄の開始。	△	△
Ⅱ	2	大木5	覆土A類	Ⅲ-2層	○		△			△	・竪穴住居、貯蔵穴？の構築開始。	△ Cタイプ？（53T東Ⅲ-3層）	○ Cタイプ〔31TⅣa層〕		貝等の小規模な廃棄。		
	1	大木3～4	覆土A類	Ⅲ-2層						△	・遺構の構築開始？	○ Cタイプ（53T東Ⅲ-3層）	△ 土器廃棄のみ？〔31TⅣa層〕		貝等の小規模な廃棄開始。		
Ⅰ	2	前期初頭～中葉		Ⅲ-2層							・土器散布のみ。						

◎=多く確認している、○=確認している、△=推定のみ

覆土A類 粘性のある締りの強い覆土（基本土層Ⅲ-2層に堆積したもの）
　褐色・暗褐色を基調とする。
覆土B類 砂質で、締りがやや弱い覆土
　1類 褐色を基調とする。（基本土層Ⅲ-6層が堆積したもの）
　2類 暗褐色を基調とする。（基本土層Ⅲ-1層が堆積したもの）
覆土C類 黒色、黒褐色を基調とする覆土

◎＝活発な形成時期、○＝形成時期、△＝可能性のある時期

Aタイプ 混貝土層としたもの（貝の計測混入率が概ね10%以上で、貝の比率が高いもの）
　A1 大木7a～9の所産で、主にBタイプの上位（斜面下位）に、明確な広がり、層厚をもって堆積しているもの。
　A2 綱取期の所産で、貝の混入率が極めて高いもの。
Bタイプ 土層・土主体層としたもの。（貝の計測混入率が概ね10%以下で、土の比率が極めて高く、褐色基調のもの。）
Cタイプ ブロック状に確認される小規模な貝層

○＝形成時期
△＝可能性のある時

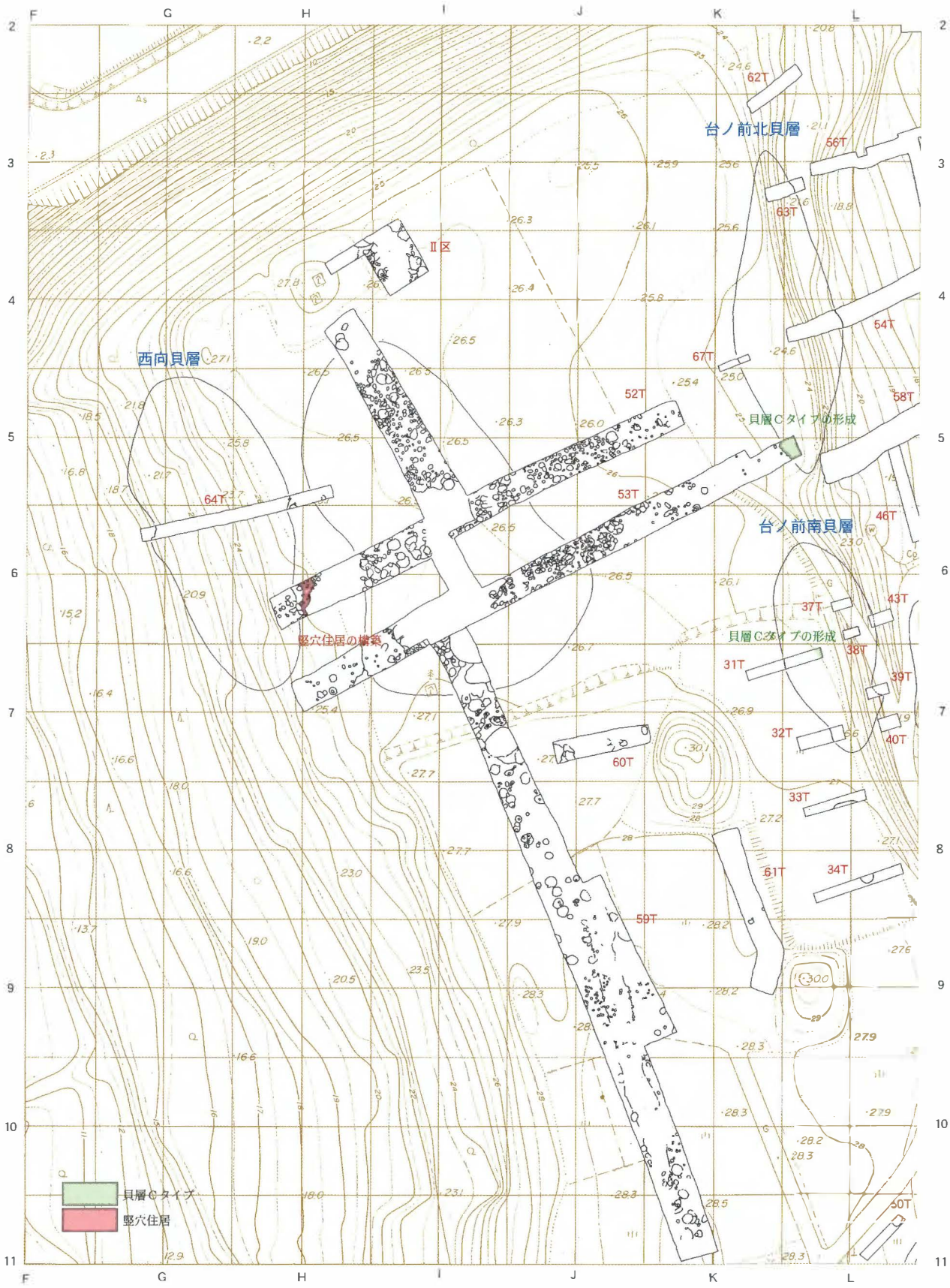


図166　南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図①〔Ⅱ期・前期後葉〕(S＝1/800)

図167　南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図②〔Ⅲ期・前期末葉～中期初頭〕（S＝1/800）

図168　南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図③〔Ⅳ期・中期前葉（大木７b式期）～中期中葉〕(S＝1/800)

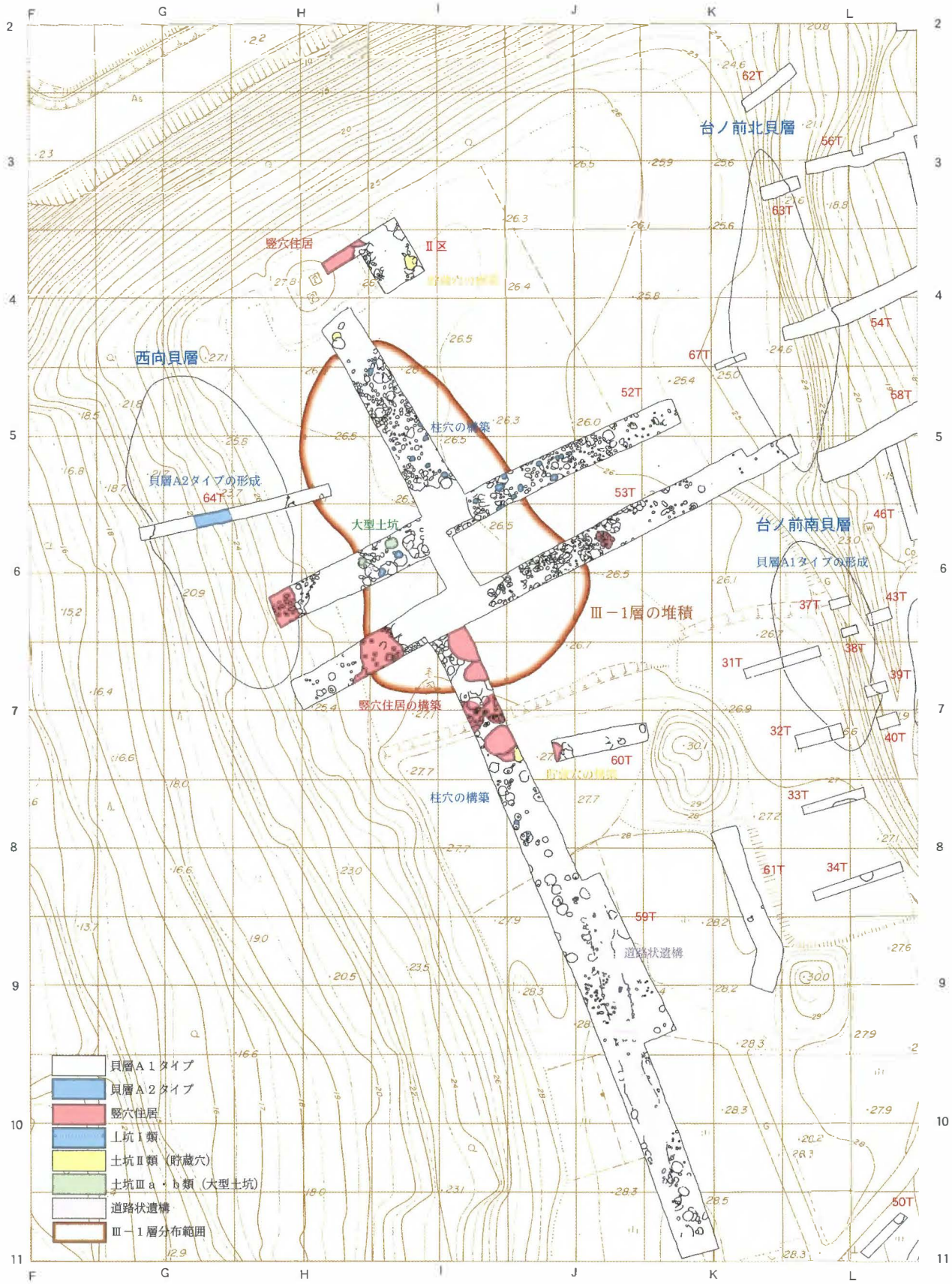


図169　南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図④〔Ⅴ期・中期後葉～後期前葉〕（S＝1/800）

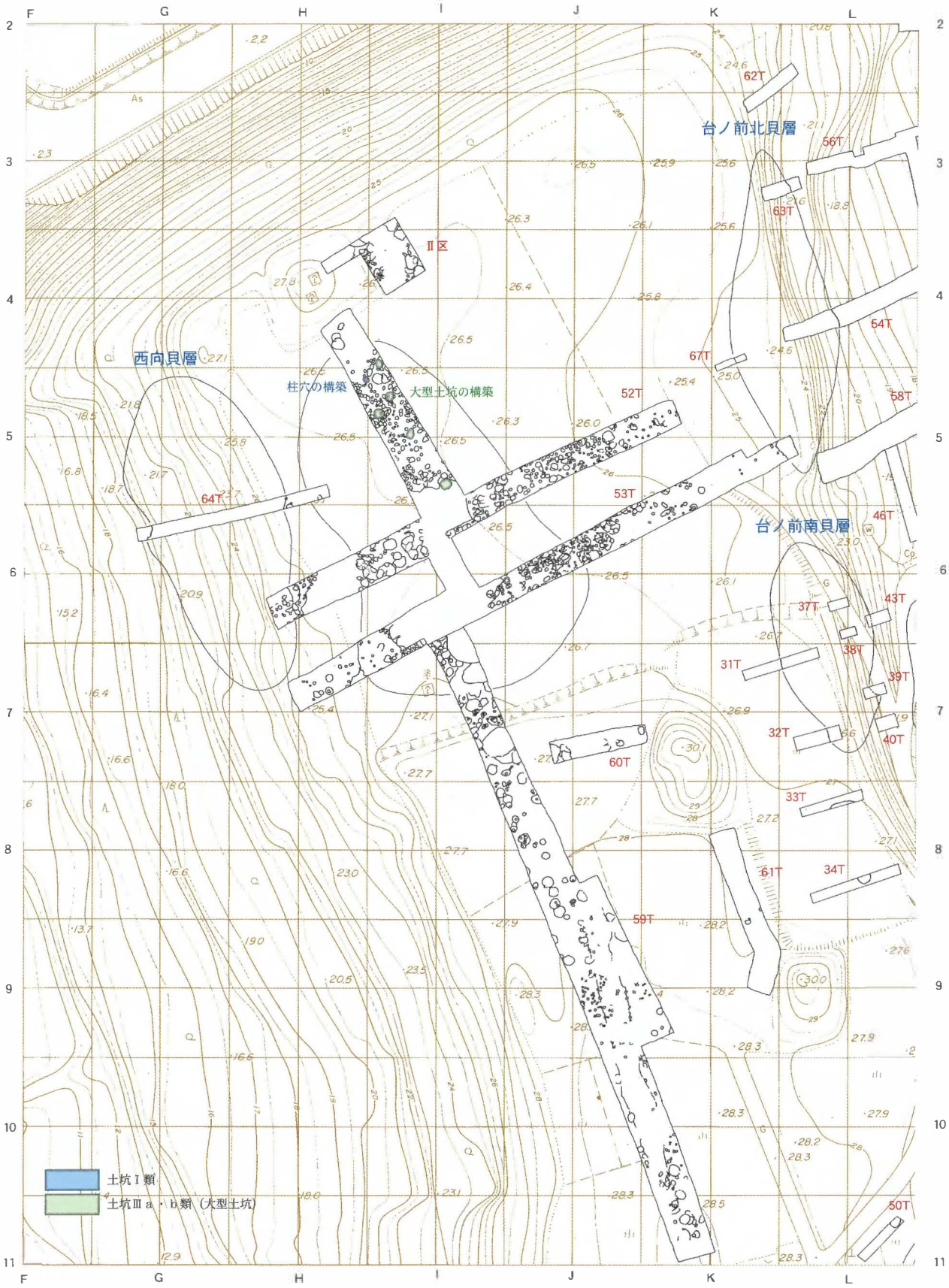


図170　南台・台ノ前・西向地区縄文遺構変遷図⑤〔Ⅵ期・後期中葉〕（S＝1/800）

及び掘削行為も縮小ながらも継続している。この段階でローム層（Ⅳ－２層）の一部は既に失われており、Ⅴ層上面まで掘削が及んでいたと考えられる。

Ⅴ期　大木９～綱取式期

遺構数が激増し、複式炉をもつ住居が最も明瞭に検出される他、柱穴の多くはこの段階に伴い、多くの施設が作られた事が認められる。小廻北地区において貯蔵穴群が継続するが、本期の最終段階では消滅するものと考えられる。貯蔵穴群の終了と同時に、南側にあった道路状遺構が埋没する。同様に墓壙と考えられる土坑Ⅲb類も最終段階では確認できない。

貝層は部分的に形成されるが、これまで継続されていた土の廃棄がほとんど行われなくなる。Ⅳ－２層は大部分が失われているが、くぼ地（掘削範囲）底面の低下や前段階の遺構の大部分の破壊を伴う掘削行為は終了するものと考えられる。この段階で、くぼ地（掘削範囲）にはⅢ－１層が堆積していく。

Ⅵ期　加曽利B式期

遺構数は激減し、墓壙と考えられる土坑Ⅲa類が掘削範囲で構築される。柱穴も極少数であり、竪穴住居も確認できず、施設の構築はほぼ終了している。掘削行為や貝層の形成はなく、掘削範囲にはⅢ－１層の堆積がほぼ終了している。

６．縄文時代の掘削行為の評価

縄文時代の掘削行為及び土の廃棄行為については、いわゆる「盛土遺構」と呼ばれるものを中心に、多くの縄文遺跡で確認されている〔千葉県流山市三輪野山貝塚（小川・小栗2003）等〕。しかし、これらは結果的に類似した状況であっても、その形成過程や内容については、地域・時期・各遺跡によって大きく異なっていると考えられ、いわゆる「盛土遺構」と浦尻貝塚例を同一視することには慎重であるべきである。まず始めに、各遺跡の形成過程・内容等を相互検討する作業が必要であろう。

浦尻貝塚では、前期末から中期前葉にかけて掘削行為及び土の廃棄の大部分が行われ、中期後葉まで継続している。また、廃棄場所（貝層）の上層から下層まで、ほぼ途切れることなく極めて多量の動物遺存体が得られており、短期間に形成されたものではないと推察される。よって、現在確認されるくぼ地と貝層の状況は、大規模な目的物を構築する作業（くぼ地の形成や斜面の造成、大規模構造物の構築等）によるものではなく、長期間にわたる継続的な掘削及び土の廃棄行為の結果と考えられる。このことは、長期間に及んで、一定の区域で継続的な同様の行為が行われたとも評価することができる。

この継続的に行われた掘削行為は、その行為自体が目的である場合と小規模な遺構の構築が目的であること（部分的な整地等も含む。）が想定されるが、浦尻貝塚のケースがどちらに該当するかは今後の課題である。また、各時期の掘削行為が異なった目的や意識から為された可能性もある。しかし、いずれの場合であったとしても、掘削範囲が長期間にわたり特徴的な使われ方をしていることが指摘できる。

掘削範囲は中期中葉以後、その一角に墓壙と推定される土坑が確認される他、中期末～後期前葉段階は竪穴住居が掘削範囲を取り囲むように構築されている。また、中期後葉～後期前葉には遺構の構築は、掘削範囲に集中して行われており、後期前葉には柱穴が増加している。後期中葉に至り明確な居住施設が確認できなくとも、墓壙と推定される土坑が存在する。この通時的な「場」の利用は、貯蔵穴群が存在する南台地区台地中央部の利用状況と対照的である。そして、このように長期間にわたっ

て特徴的な利用が行われる「場」において、集落の開始段階に掘削行為及び土の廃棄行為が行われ、それが継続していると指摘できる。

浦尻貝塚は、小廻北・南地区を除いた範囲においても前期末～後期前葉までの居住地であり、周辺遺跡に比して継続期間が長い遺跡である。また、浦尻貝塚は、前段階の北原貝塚遺跡群と並び、旧井田川浦周辺（古宮田湾）の貝塚群では、貝塚の規模が大きい。このような拠点的なあり方をみせる集落に、長期間の掘削行為及び土の廃棄という特徴的な行為が認められることも、今後、縄文時代の集落研究を進める上で重要な事柄と言うことができるだろう。

このような状況は、岩手県宮古市崎山貝塚（高橋・三浦1995）との類似点が認められる。崎山貝塚は前期前葉～後期前葉まで長期間にわたって集落が営まれており、集落の中心部が「非居住空間」として中期前葉から区別されている。大木８b式期には、「中央広場」・掘削及び盛土を伴う「環状遺構帯」・「居住域」からなる「同心円状の重層構造」が認められ、この構造は後期前葉まで変容しながらも継続している。

浦尻貝塚南台地区等では、「重層構造」、中心部の「非居住地空間」といった点は明確ではないが、周辺遺跡に比して長期間営まれていること、集落の中心部を意識した集落変遷、中心部への掘削行為が行われている点は共通する。この事は、大木式土器分布圏の拠点集落の一類型として認めることができよう。

これまで見てきたように、南台地区等では、ローム層の掘削及び斜面への土・貝・獣魚骨の廃棄という段丘上の集落の動向と貝塚の形成に有機的な関連性が認められた。この検討は、「貝塚」と「集落」がセットで確認できる浦尻貝塚において可能であったことであり、浦尻貝塚の大きな特徴として改めて評価されることと言えよう。